

ミイラ —永遠の生命がやどるもの—

内田 杉彦

明倫短期大学 歯科技工士学科

Mummy - The Dwelling of Eternal Life -

Sugihiko Uchida

Department of Dental Technology, Meirin College

要旨

古代エジプト人によるミイラ作りの背景には、死後の再生には「肉体」が必要であるとする彼らの来世信仰があった。ミイラは彼らが思い描いた理想的な死後の姿であり、それは来世観念の変化に伴って、生前の地位や身分を示す姿から、「神」として復活した姿へと変わっていった。ミイラは「死」という普遍的な課題に対して古代エジプト人が提示した回答であり、彼らの死生観や生活環境について多くを物語る貴重な資料と言えるだろう。

キーワード：古代エジプト，ミイラ，来世，死

Keywords: Ancient Egypt, Mummy, Afterlife, Death

1. はじめに^{1,2)}

ミイラは、現代人が古代エジプトについて思い浮かべる代表的なイメージのひとつと言える。この「ミイラ」という呼称は、アラビア語のムミア（瀝青）に由来するとみられるが、これはミイラの黒ずんだ皮膚が瀝青によるものと信じられたためと思われる。瀝青を用いたミイラは実際にはわずかであり、ミイラの黒い色は多くの場合、ミイラ作りに広く使われた樹脂が変化して生じたものだが、「ミイラ」という呼称は一般に定着していると言えよう。瀝青

はイスラム世界や西欧では古くから薬物とされ、ミイラもまた古くから同じ薬効を持つとされていた。エジプトのミイラがようやく過去の文明の遺物として扱われるようになり、多少とも学問的な興味の対象となったのは、古代エジプト文明への関心が高まった19世紀以降のことである。

ミイラ作りの背景にあったのは、古代エジプト人の来世信仰であった。死後は来世に復活して永遠の生命を得ることを願った彼らは、この復活・再生には「肉体」が必要と考えていた³⁾。彼らにとって、「生きている」というのは、生命力（カア）が肉体に宿っている状態であり、「死」とはすなわち、カアが肉体から離れた状態だった。死者が来世で暮らすには、カアが再び宿る肉体が必要であり、遺体をこの「肉体」として保存しようとした試みがミイラ作りだったと言える。新王国時代の王墓には、ミイラの姿で永遠の眠りにについている死者が、冥界へ下った太陽神の光を浴び、身にまとう包帯を脱ぎ捨て復活する場面が描かれているが、これはそうしたミイラの意義を示している⁴⁾。

死者には肉体が必要という概念が生じたきっかけは、ひとつには、エジプトの自然環境だったと思われる。先王朝時代には、死者は砂漠に浅く掘られた墓穴に埋められ、その結果、遺体は高温乾燥の砂によって天然のミイラとなり、骨だけでなく皮膚や毛髪までも残る場合があった。一般には、当時の人々

がこれを目にした経験から、死後に肉体が必要とされるという概念が生じたと言われる。ただし実際には白骨化したり、野獣に掘り返され食われてしまう遺体も少なくなかった。こうした現実直面したとき、来世のための肉体が損なわれることへの恐怖、遺体を（少なくとも来世で使える形に）保ちたいという願望が生じ、そこから遺体保存の考え方が生じたとみられる。紀元前3500年頃には、樹脂に浸して硬くした亜麻布で補強と肉付けをし、包帯で巻いた遺体が砂漠に埋葬されているが、これはそのような概念が早くからあったことを示す。同じ頃、上流階級の人々の遺体は棺にいれられ、墓穴の上に屋根をかけた墓室に安置されるようになるが、これも来世のため、遺体を野獣などから守ろうとしたものだろう。ところがこのような棺や墓は、遺体の保存とは逆の結果をもたらした。天然の乾燥剤といえる砂から切り離された遺体は腐敗してしまったのである。上流階級の人々にとって棺や新たな形式の墓は地位や富の象徴であり、遺体をじかに砂漠に埋めるかつての埋葬法に戻ることは論外だったであろう。彼らの関心は、棺や墓だけでなく遺体の人工保存の試みにも向けられることになり、それがついには、腐敗しやすい内臓の除去を含む本格的なミイラ作りへとつながったのである。

2. 資料^{1,2)}

古代エジプト人が残した文字資料のうちミイラ作りに触れたものは稀であり、ミイラ製作の手順を具体的に記した例はみられない。墓壁画などの図像資料にも、ミイラ作りの場面が描かれることは少ない。一方、ギリシア・ローマ時代のパピルス文書には、ミイラを包帯で巻く手順、それに伴う儀礼や呪文、護符に関する指示を記したものがあり、ミイラ作りが死者の再生・復活の儀礼として重視されていたことがうかがえる。

エジプトにおけるミイラ作りのプロセスについて多くの情報を伝えているのはギリシア・ローマの著述家であり、なかでも紀元前5世紀のヘロドトスの記述は代表的なものと言える。彼は遺体の防腐処置の方法として、値段により異なる三通りの方法を記しており、それによると、最も高価な方法では、まず先の曲がった刃物で遺体の鼻孔から脳をかき出し、薬品を注入して脳の残りを除去したあと、黒曜石のナイフで遺体の脇腹に切れ目を入れ、そこから内臓を取り出すとされている。内臓を出した後の体

腔は椰子酒などで清めてから香料をつめ、脇腹の切れ目を縫い合わせる。ついで遺体を70日間、ナトロン（天然炭酸ソーダ）で覆ってから洗い、植物から分泌されるゴムを塗った亜麻布の包帯で巻くのである。次に高価な方法は、遺体の肛門から杉油を注入して内臓を溶かし、遺体をナトロンで70日間、乾燥させたあと、杉油と溶けた内臓を排出するというものであり、最も安価な方法は、遺体を乾燥させる工程は同じだが、内臓の摘出や溶解は行わず、洗腸で内臓を清めるだけのものとされている。ヘロドトスのほか、ミイラ作りに言及した主要な著述家としては、紀元前1世紀のディオドロスと後3世紀のポルフィリオスが挙げられる。ディオドロスはヘロドトスの記述とほぼ一致するミイラ作りの手順にくわえ、ミイラ職人の地位や役割について述べており、ポルフィリオスの記述は、摘出された内臓が遺体とは別に保存される慣行に言及している点で重要である²⁾。

現在では、19世紀以来おこなわれてきたミイラの解体調査にくわえ、エックス線やCTスキャン、内視鏡などを用いた調査を通して、彼らギリシア・ローマの作家の記述を補足・修正する数多くの情報が得られている。これによって、ミイラ製作技法の細部、ミイラ作りの発展過程、ヘロドトスの記述にあるようないくつかの技法の共存などが明らかになった。

3. ミイラ作りの発展^{1,2)}

表1. 古代エジプト年表(内田杉彦『古代エジプト入門』岩波書店、2007年 の年表より)

先王朝時代(紀元前5500~3000年)
王朝時代(紀元前3000~332年)
初期王朝時代(第1~2王朝:前3000~2682年)
古王国時代(第3~6王朝:前2682~2191年)
第一中間期(第7~11王朝:前2191~2025年)
中王国時代(第11~12王朝:前2025~1794年)
第二中間期(第13~17王朝:前1794~1550年)
新王国時代(第18~20王朝:前1550~1069年)
第三中間期(第21~25王朝:前1069~712年)
末期王朝時代(第25~31王朝:前712~332年)
ギリシア系王朝時代(前332~30年)
プトレマイオス朝時代(前304~30年)
ローマ支配時代(前30年~後395年)

初期王朝時代には、上流階級の人々の遺体各部分を樹脂に浸した亜麻布で巻いて、外形を保つ方法がとられていたとみられる。第1王朝のジェル王墓出土の(王本人か王妃の)腕はその最古の例と言える

だろう。第2王朝時代の墓から出土した女性のミイラは、おそらくナトロンによる脱水乾燥のあと、16層以上の包帯で手足が別々に巻かれていた。ジュエル王墓出土の腕も、この女性遺体もほぼ白骨化しており、当時のミイラ作りが初歩的な段階だったことがうかがえる。

続く古王国時代には、とくに王族や貴族のミイラのため、比較的高度の製作技法が用いられるようになった。なかでも重要な意味をもつのは、遅くとも第4王朝時代までに、遺体から4つの内臓(肝臓、肺、胃、腸)が摘出され、遺体とは別に保存されるようになったことである。第4王朝初期には、そうした内臓を安置する窪みを墓室の壁にもつ墓がいくつかみられ、亜麻布に包まれた内臓がそこから発見された事例も報告されている。また、クフ王の母である王妃ヘテプヘレス1世の墓からは、彼女の遺体から摘出した内臓を納めた箱形の容器(「カノプス箱」)が発見された。方解石で作られたこのカノプス箱は内部が4つの区画に分かれ、それぞれの区画には亜麻布で包まれナトロンの水溶液に浸された内臓の残滓が入っていた。これは当時のミイラ作りで、内臓と遺体の乾燥に、ナトロンの水溶液が使われていたことを示すのかもしれない。古王国時代にはさらに、4つが一組になった壺形の内臓容器(「カノプス壺」)も導入された。このカノプス壺は石材で作られ、円盤形の蓋がつく簡単なもので、ヘテプヘレス1世の曾孫にあたる王妃メレスアंक3世の墓で発見されたものが最古の例とされる。

とはいえ内臓の摘出はまだ一部のミイラに限られており、脳の摘出も行われていなかったと思われる。当時のミイラでは概して遺体の保存状態は悪く、筋肉や皮膚はあまり残っていないが、その外観はしばしば生前の姿を思わせる「人物像」に作り上げられた。たとえば第4王朝時代の貴族ラーネフェルのミイラの場合、遺体を巻いた包帯には樹脂が塗られ、顔の部分に毛髪や目、眉、口などが顔料を用いて描かれている。第5～6王朝時代には、外側の包帯にさらに化粧漆喰が塗られ、顔や別々に包帯を巻かれた手足を彫像のように表現したミイラが作られるようになった。このように外観を強調されたミイラのなかには、当時の上流階級の衣服を着せられたものさえ見ることができる。

すなわち当時のミイラは、遺体そのものよりも、遺体の外観を保存することに重点を置いたものだったと言えるだろう。その外観は、当時の墓の浮彫や

壁画、彫像に表現された死者の特徴と一致しているが、これは当時の上流階級が自分たちの来世の姿として思い描いていたイメージであり、彼らの「来世」が、王を頂点とした現世の身分秩序の延長だったことを示している。古王国時代には、王は死後に太陽神ラーあるいは冥界の神オシリスとして永遠の生命を得るとされていたのに対して、それ以外の一般人は、死後も現世と同じ地位に甘んじると信じられていたのだろう³⁾。

このような来世観念は、古王国の衰退と滅亡によって変わることになる。死後の王に「神」としての復活・再生を約束した葬祭文書「ピラミッド・テキスト」の呪文が王以外の上流階級によって、新たな葬祭文書「コフィン・テキスト」に利用されるようになり、生前の正しい言動が復活・再生の鍵となる「死者の審判」の概念が、来世信仰において大きな位置を占めるようになったのである³⁾。これによって、冥界の王として永遠の生命を得たとされるオシリスと同じ復活・再生の道が王以外の一般人にも開かれることとなった。

この来世のイメージの変化とともに、ミイラの表現様式にも変化が生じる。古王国に続く第一中間期には、死者を生前の姿のように表すのではなく、全身を亜麻布で繭のように巻いたミイラが作られるようになるのである。ミイラの顔は包帯の下に隠され、パピルスと亜麻布の断片を化粧漆喰で固めたカルトナーージュに彩色を施したマスクが頭部にかぶせられた。こうしたミイラの姿は、「オシリス」として復活を遂げた死者という、新たな死者観念を表すものであろう。ミイラのマスクは、肩を覆う長い鬘や、黄色あるいは金色の皮膚といった特徴をもつが、こ

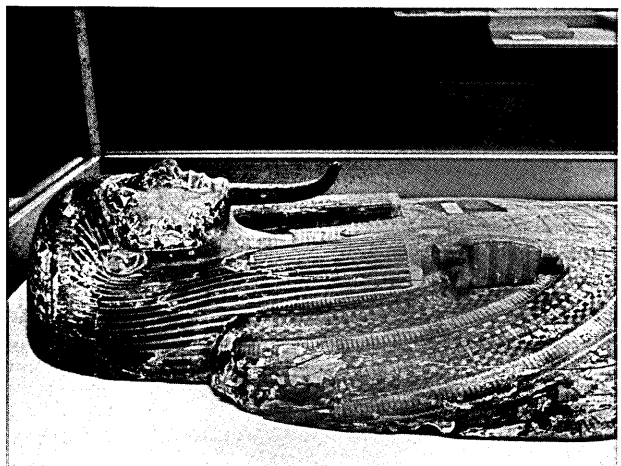


図1 第三中間期の人形棺：蓋の部分(中近東文化センター附属博物館)

れは死者が生前とは異なる「神」の立場となることを示すとみられる。包帯に包まれマスクをかぶったミイラの姿も、頭部を除く全身を包帯で包まれたオシリス神の特徴を示すと考えられるのである。

この第一中間期のミイラ形式は、新たな来世観念とともに、続く中王国時代にも引き継がれ、頭部だけでなく全身がカルトナージュで包まれたミイラも作られるようになる。このミイラ全体を覆うカルトナージュからは新たな様式の棺である「人形棺」が発展するが、ミイラを包むカルトナージュや人形棺は、マスクをかぶったミイラの姿を模倣したものと言える。それらはミイラを物理的に保護するばかりでなく、マスクと同じく、死者が「神」として復活・再生を遂げることを示し、それを助ける目的を持っていたと考えられる。

第一中間期と中王国時代には、ミイラの製作技法にも変化が生じている。遺体の乾燥には粉末のナトロンが使われるようになり、脳の除去も、いくつかのミイラですで行われていた。より重要な発展は、内臓をおさめるカノプス容器の変化である。中王国時代のカノプス容器は、上流階級の埋葬の場合、カノプス箱に納められた4つ一組のカノプス壺が一般的となったが、この壺の蓋がかつての円盤形から人間の頭部の形へと変わったのである。この人頭はミイラのマスクと同様に長い鬘を付けた姿であり、したがってこのようなカノプス壺は本来、遺体から摘出した内臓も、死者の再生・復活に必要な「肉体」の一部であることを強調したものだっただけかもしれない。

しかし中王国時代には、カノプス容器にいれられた4つの内臓はそれぞれ、ホルス神の息子とされた四柱の神々（イムセティ、ハピ、ドゥアムテフ、ケベフセヌエフ）の保護下にあると信じられるように

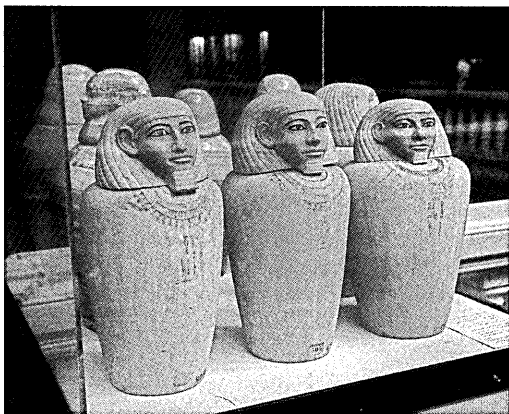


図2 人頭形の蓋がついたカノプス壺

なり、人頭のついたカノプス壺は彼らの姿とされるようになった。彼らはホルスの父であるオシリスの孫にあたり、このような神々がミイラの内臓を守るという概念もまた、死者をオシリス神と同一視する当時の来世観念によるものと言える。一方、彼ら「ホルスの息子」たちもそれぞれ特定の女神に守られると考えられており、中王国時代のカノプス箱には、この女神たち（イシス、ネフティス、ネイト、セルケト）への祈願文が記されている。彼女たちのなかに、オシリスの再生・復活に活躍したイシスとネフティスが含まれるのも、オシリスと死者を同一視する見方によるものと言えるだろう。

中王国時代とそれに続く第二中間期のミイラのなかには、心臓が体内に残されるか、いったん摘出された心臓が戻されている例がいくつか確認できる。古代エジプト人は、脳の役割を理解しておらず、ミイラ作りでも脳の保存はしなかったが、一方で心臓を生命活動の中心、理性と感情のやどるところと信じていた。そのため、心臓は「死者の審判」に合格する鍵とされ、中王国時代の葬祭文書「コフィン・テキスト」には、心臓が死者のもとにとどまり、死者に対して不利な証言をしないようにするための呪文が含まれている⁵⁾。当時のミイラに心臓が残された例が見られるのは、心臓が持つとされたこのような意義によるものだろう。この心臓の重要性は新王国時代になるとさらに強調される。「死者の審判」では、死者の再生・復活の是非を判定するため、心臓が真理や正義を象徴するマアトの羽根とともに秤にかけられるとされるようになり、心臓は必ずミイラの体内に残されるようになるのである。

さて、中王国時代のミイラの特徴としてさらに挙げられるのは、ヘロドトスの記した第二の方法、すなわち肛門から液体を注入する方法が行われていたという点である。テーベ西岸のデイル・エル＝バハリで発見された第11王朝の国王メンチュホテプ2世の妃や王女たちのミイラには内臓を摘出するための切れ目が見られず、体内にも内臓の残滓が入ったままだった。そのうちいくつかのミイラでは、肛門に油あるいは樹脂と内臓の一部が付着しており、肛門から油が注入されて、そこから内臓の一部が流れ出した可能性がある。ただし、体内に内臓が残っているところからみて、油が注入されたとしてもそれはヘロドトスが記すように内臓を溶かすためではなく、むしろ保存するためだったと考えるのが妥当であり、内臓の一部が流出しているのは、腐敗による

ものと考えることができる²⁾。いずれにしろ、ヘロドトスが二番目に安価な方法としているこの方式は、中王国時代には一部の人々のみが利用できた実験的な試みだったのだろう。

デイル・エル＝バハリには、戦死した兵士たちの遺体も集団埋葬されていたが、それらは砂に埋めて乾燥させたあと包帯を巻いただけのもので、ヘロドトスによる最も安価なミイラ作りに近い技法を示している。このような簡単な技法は、新王国時代以降の比較的低い階層のミイラにも確認されており、ミイラ作りがある程度は普及したとはいえ、その質には、地位や富による格差があったことを示している。また、国民の大多数を占める庶民にとっては、遺体をミイラにしてもらうこと自体、思いもよらなかったことは確かだろう。

第二中間期にエジプトを支配した西アジア系の異民族ヒクソスは、自分たちの遺体をミイラにすることはなかったように思われる。また、同時期のミイラで現存する例は少なく、残っているものも保存が良くない。ヒクソスと戦った第17王朝の王、セケンエンラー・タアのミイラは脳と内臓が摘出されているが、皮膚と人骨が残る程度であり、しかも頭蓋骨に槍や斧による傷が口を開けた無惨な外観をとどめている。これはかつては、ヒクソスとの戦いで戦死した王の遺体をあわただしくミイラにしたものとされていたが、最近の調査によって治癒の痕のある傷が確認され、王が戦場で重傷を負ったあと暗殺された可能性が指摘されている。

4. 新王国時代のミイラ作り^{1,2)}

第二中間期に続く新王国時代には、王族や上級貴族のミイラ作りが進展をみせた。なかでもテーベ西岸、とくに王墓地の「王家の谷」に埋葬された王族のミイラには保存状態が良いものが多く、ヘロドトスの記す最上級のミイラ製作法に近い技術が使われたと言える。

新王国の最高水準のミイラ作りでは、遺体は死後すぐにナトロンの水溶液で洗浄されてから、ミイラ作りの作業場へ運ばれた。作業場ではまず遺体から脳が摘出されたとみられるが、それには鋭い刃物を鼻腔に差し込んで篩骨に孔を開け、そこから頭蓋内部に先の曲がった刃物を差し込んで脳をかき出すのが普通だった。第18王朝初代国王アハモセ1世のミイラでは首に切れ目が入られ、そこから大後頭孔を通して脳が取り出されているが、この方法は困難

であり、その後はあまり使われていない。いずれにせよ、脳は摘出される過程で溶けるか粉々になっており、保存はされずに廃棄されたが、これは前述のように脳の機能が理解されておらず、単に遺体の腐敗を防ぐため除去するのが望ましいとされていたためだろう。脳を出したあとの頭蓋内部には鼻腔から亜麻布やおがくずが押し込まれるか、あるいは溶かした樹脂が流し込まれた。

遺体の胸部と腹部から内臓を摘出するには、黒曜石かフリントのナイフで左脇腹に切れ目が入られた。ミイラ職人はそこから胃と腸を引き出したあと、横隔膜に孔をあけ、肺と肝臓を取り出したとみられる。内臓が出されたあとの体腔には、防虫や防臭のための樹脂、水分吸収のためのナトロンの包み、亜麻布などを詰め、遺体を粉末のナトロンで覆ってから放置した。遺体乾燥は、ヘロドトスによると70日を要したとされているが、第18王朝時代の墓銘によれば、遺体がミイラ作りの場所にとどまる期間が70日間とされており、この日数は実際にはミイラ作りの工程全体の所要期間だったと思われる。おそらく実際の遺体乾燥には約40日間を要し、残りの日数が包帯巻きなどその他の作業や儀礼にあてられたとみるのが妥当であろう。「70日」は、毎年ナイル氾濫の直前にシリウス星が夜空から姿を消す日数でもあったから、このミイラ製作日数は、豊かな実りをもたらす国土を再生させる氾濫になぞらえて、死者の復活・再生をうながすために決められた可能性もある。

乾燥工程が終わると、筋肉組織と皮下脂肪の多くが失われた遺体は、縮んでシワが寄った皮膚が骨の上を覆う状態になったであろう。この外見を体裁よく整えて芳香をつけるため、体腔に詰めてあったナトロンの包みや樹脂などが取り出され、その代わりに、樹脂に浸した亜麻布、おがくず、香料、苔などが入れられた。この詰め物を入れ終わると、ミイラ職人は脇腹の切れ目を樹脂や金属片で覆うか、縫い合わせた。

遺体の表面には、皮膚をいくらか柔軟にして良い香りを付けるため、溶かした樹脂と香料が塗られたが、樹脂は湿気を防ぐ効果があり、冷えれば固まったから、遺体の保護にも役立ったと言える。しかし遺体が乾燥する過程で皮下脂肪と筋肉組織が失われたため、皮膚にシワがよって手足の爪が取れそうになることがあった。そこで多くのミイラでは爪の脱落を防ぐため、指の先端が糸で巻かれている。指に

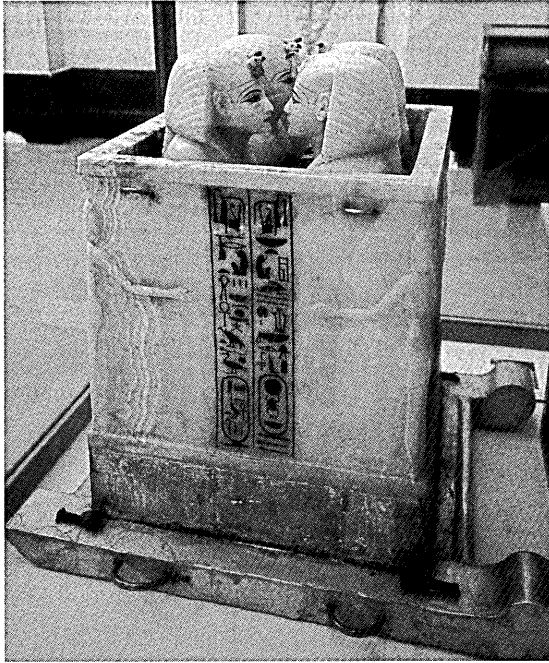


図3 トウトアムンのカノプス箱

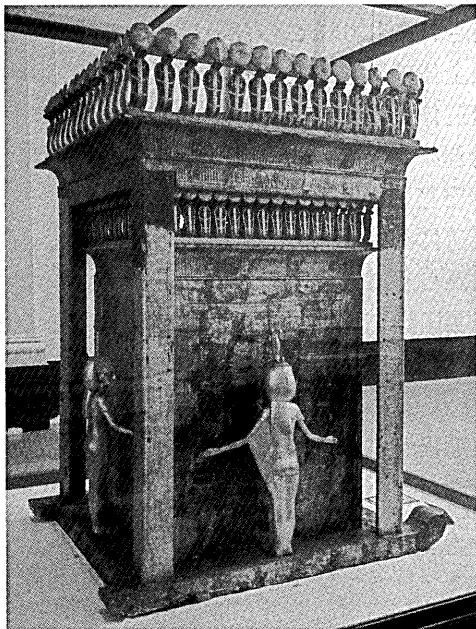


図4 トウトアムンのカノプス箱を納めていた厨子

は金や銀のサックがはめられることもあったが、これは爪を守るためだけでなく、ミイラの指が損傷したときに代わりとなるとされていたのだろう。生前の姿をできるだけ保とうとする試みもなされ、たとえば乾燥によって縮んだ眼球に代わる「義眼」として、タマネギや巻いた亜麻布などが使われた。第19王朝の国王ラメセス2世のミイラでは、特徴的な鷲鼻が包帯の下でつぶれないように、動物の骨や植物の種が詰められている。年老いてから亡くなった女性王族のミイラの場合、毛髪が薄くなった個所に付



図5 「ホルスの息子」の頭部の蓋を持つカノプス壺と、それを収納したカノプス箱

け毛が施された例も見られる。

こうして外観を整えられたミイラには亜麻布の包帯が巻かれたが、何層にも巻かれた包帯の間には、死者の復活・再生を助ける護符が巻き込まれた。この種の護符としては魔除けの護符であるウエジャト（「ホルスの眼」）のほか、オシリスの背骨を表すジェド（来世で死者が直立する力を与える護符）、イシスの帯を表すティト（死者の「肉体」を守る護符）などのほか、心臓をかたどった護符や甲虫形の「心臓スカラベ」など万一の場合に心臓の代わりとなる護符があった。

包帯巻きが終わった遺体は埋葬布で覆われ、数カ所を紐で縛られ固定されてから、頭部にマスクがかぶせられた。このマスクはカルトナーージュに彩色するか金箔を貼るものが一般的だったが、王のミイラの場合にはトウトアムンの「黄金のマスク」のように金で作られたとみられる。ミイラにはさらに装身具や護符、埋葬布を縛る紐を模倣したベルト装飾などが付けられたが、トウトアムンのミイラではさらに王笏を握る手が金で作られ、包帯に縫いつけられた。

遺体から摘出された4つの内臓は、ナトロで脱水され、樹脂で覆われたあと、亜麻布で包まれてカノプス容器に入れられた。新王国時代のカノプス容器は4つのカノプス壺とそれを納めるカノプス箱からなっていたが、王のカノプス容器はもっと精巧に作られていた。たとえばトウトアムンの場合、内臓が納められたのは壺ではなく小さな黄金の棺であり、これらの棺は亜麻布にくるまれ、方解石のカノプス箱の内部にうがたれた4つの円筒形の穴に入れられた。この穴は王の頭部をかたどった蓋に覆われ、その上からカノプス箱全体の蓋がかぶせられたが、この箱はさらに、金箔を貼った木製の厨子に納

められていたのである。カノプス箱と厨子の周囲には、「ホルスの4人の息子」を守る女神たちの姿が、浮彫りや彫像で表された。トゥトアムンクアムンのミイラは、4つの厨子と石棺、3つの人形棺によって「入れ子式」に保護されていたが、王の内臓も同じように手厚く守られていたのである。

第18王朝後期には、カノプス壺の形式に変化が生じる。従来の人頭形ではなく「ホルスの息子」の頭部、すなわちイムセティを表す人間、ハピのヒビ、ドゥアムテフのジャッカル、ケベフセヌエフのハヤブサの頭部をかたどった蓋を持つカノプス容器が作られるようになったのである。この新しい形式のカノプス壺は第19王朝以降、一般的となるが、これによって、カノプス壺が「ホルスの息子」たちを表すことが強調され、中身の内臓と照合することで、イムセティが肝臓、ハピが肺、ドゥアムテフが胃、ケベフセヌエフが腸を守る神とされていたことが、以前よりも明白となった。

5. ミイラ作りの衰退^{1,2)}

新王国の末期から第三中間期はじめの第21王朝時代は、ミイラ作りの技術が頂点に達した時期とされる。この時期のミイラ職人は新王国時代の技法を発展させ、遺体の自然な外観をできる限り再現することに力を注いだ。彼らが用いた特徴的な技法は、縮んだ遺体の皮膚のシワを伸ばすため、皮下に泥や亜麻布、おがくず、砂などを詰めるというもので、内臓摘出のための脇腹の切れ目だけでなく、頭部や首、手足などに新たに入れた切れ目からも詰め物がされた。さらにガラスや石の義眼、念入りに編んだ鬘が使われたほか、生前の傷の修復も行われた。たとえば長期間にわたって病床についたあとと亡くなったとみられる女性のミイラでは、床ずれの痕の穴に獣皮で継ぎがあてられている²⁾。

一方、かつて遺体とは別に保存されていた4つの内臓は「ホルスの息子」たちの小像とともに体腔に戻されるようになったが、これもミイラを生前の状態に近づけたいという意識のあらわれかもしれない。ただし不要になったはずのカノプス壺は依然として副葬されており、中身が空か、容器の役割を果たさない形だけの壺が使われていた。

第21王朝時代を過ぎるとミイラそのものの保存・修復技術は衰えはじめ、遺体の皮下に詰め物をする技法も廃れていく。そしてその反面、溶かした樹脂を遺体の表面だけでなく、包帯やその外側のカルト

ナージュにも大量に塗り、内部にも注入して遺体の外形保存をはかる傾向が生じ、樹脂のかわりに瀝青を使ったミイラも作られるようになった。こうした安直な技法が広まった背景には、ミイラ作りが以前より普及して安価なミイラが大量生産されたこともあったのだろう。

ギリシア・ローマ時代には、ミイラの外観にいつそう重点が置かれるようになり、美しい菱形のパターンを示すように巻かれた包帯や、マスクの代わりに採用された死者の肖像画などがみられるようになる。しかし多くの場合、この華麗な装飾の下にある遺体の状況は悪く、バラバラになった骨がいろいろ加減に配列されものや、身体の一部が失われたミイラ、複数の遺体の一部が集められているミイラなどもみられる。これは遺体がミイラとされる前はかなり腐敗していたり、遺体を保存する工程がなごりにされていたことを示しており、当時のミイラ製作技法の衰退を物語ると言える。しかし来世のためには「肉体」が必要という意識は、すぐに消えさることはなかった。エジプトがキリスト教の影響下に入った紀元後4世紀に、ミイラ作りは異教の風習として禁止されるが、それでもなお、当時の修道士の遺体のなかには、塩やナトロンで乾燥させてから埋葬したものがみられる。エジプトにおける遺体保存の慣習は、おそらく紀元後7世紀のイスラム教の到来まで続いたと思われるのである。

6. おわりに

ミイラは、現代人にも共通する切実な問題である「死」に対して、古代エジプト人が彼らなりに示した答えであると言える。それはまた、彼らの死生観だけでなくその生活についても語ってくれる。ミイラやその内臓からは、当時の人々がどのような環境のもとで暮らし、どんな病気に苦しんでいたかも知ることができるのである。ミイラはまさに古代エジプト人の「生命」をやどした貴重な遺物であり、彼らの過ごしていた社会の一端を、数千年のときをへて伝えてくれる「タイムカプセル」と言えるだろう。

文 献

- 1) Taylor, J.H.: *Death & the Afterlife in Ancient Egypt*. The British Museum Press, London, 2001
- 2) Ikram, S. and A. Dodson: *The Mummy in*

- Ancient Egypt: Equipping the Dead for Eternity. Thames and Hudson, London, 1998
- 3) 内田杉彦 : 古代エジプトの「死後の世界」. 明倫齒誌 5(1) : 58-63, 2002
- 4) D' Auria, S. et al. : Mummies & Magic : The Funerary Arts of Ancient Egypt. pp34-35, Museum of Fine Arts, Boston, 1988
- 5) Grieshammer, R. : Das Jenseitsgericht in den Sargtexten. pp51-55, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1970